

琉球方言と九州諸方言との比較（I）

野原三義

琉球方言の北限は奄美大島で、それより北の吐噶喇や種子屋久の島島は本土方言に属する。この境界線は学会の定説といってよいもので、疑を唱える者はいないだろう。こういうことを最初から知ると、いつしか、必要以上に巨大化・肥大化させて、あたかも、越すに越されぬ大河があるように思いこんでしまう。しかし、琉球の島島を北東から日本語が、覆って来たのは確かであろう。ならば、琉球方言が北接する本土方言の南端、九州の方言との関係について考えるのは、ごく普通のことである。先学の仕事の中にも、かような観点から、行ったものがないわけではないが、極めて少ないように思われる。

ここで取り上げるものは、1938年生の沖縄南部方言に属する那覇方言の話手である筆者の目について、いくつかの九州の資料によるものである。琉球の他の地域、奄美や宮古八重山方言の話し手、とりわけ、これらの地域の古老達が調査すれば、もっと多くの関連する語彙が抽出できるであろう。

カードを整理しておこうと思うようになったのは、ある資料から得られる語彙の量が大体一定してきたためである。

方言集の略称

引用文献は詳細に書くべきであるが、略称を用いた方がよいと思われるものは略称を用いる。略称名は下記の通りである。

『鹿児島方言辞典』・・・『鹿辞』
『都城方言集』・・・『都城方』
『五島方言集』・・・『五島方』
『熊本県南部方言考』・・・『熊南方』
『熊本県方言資料篇』・・・『熊方資』

『肥後方言集』・・・『肥後方』
『大隅肝属郡方言集』・・・『大隅方』
『対馬南部方言集』・・・『対馬方』
『佐賀県方言辞典』・・・『佐賀方』
『博多方言』・・・『博多方』
『大分県方言類集』・・・『大分方』
『九州方言の基礎的研究』・『九州方言』
『漂流民の言語』に収められている「ゴンザの伝える18世紀前半の薩摩方言」・・・
・・・ゴンザ『漂流民』
『薩南諸島の総合的研究』・『薩南諸島』
『五島列島の方言』・・・『五島列島』
『沖縄語辞典』・・・『沖辞』
『^{標音}_譯琉歌全集』・・・『琉歌全集』

アイサ 物の間隔 球磨山村語彙（「方言」5-8）

?e:dʒa <物と物との間>

アエル 落ちる。汁、果物などの自然に墜落するのをいう 『大隅方』

アユル 落ちる 『五島方』

アユイ 落ちル 『鹿辞』

?e:iŋ <化膿した腫物がつぶれること>。

鳩間方言の?airuŋには「果実が十分に熟れて自然に落ちる」という意味があるという

（『全国方言基礎語彙の研究』p445）

あおなく 仰向くなり 上五島方言考(一)（「方言」7-7）

アオナク 仰向く 『肥後方』

あをなく 仰ぐ 『博多方』

アオノキ 仰 『大分方』

?aφanatʃuŋ<眼るの卑語>ma:φanatʃa:

<仰向けに寝る寝方>

- アオモイ 泡盛 『鹿辞』
 アヲモイ ウォツカ (泡盛) ゴンザ『漂流民』
 那覇方言では泡盛のことをsakiという。
 首里語辞典である『沖辞』には?aamui
 <泡盛>がみえる。
- アカ 船に溜る水 肥前茂木漁村語彙(「方言」6-10)
 アカ 船中の溜り水 日向日置漁村語彙(「方言」6-10)
 アカ 舟の溜り水 豊後網代漁村語彙(「方言」6-10)
 アカ 舟の浸水 『鹿辞』
 あか 船底に溜りたる水 上五島方言考(一)(「方言」7-7)
 水 薩摩にてあかといふ 『物類称呼』
 ?aka <船に溜まった水>
- aga 貴方 福江(『五島列島』)
 agadaT 貴方がた 福江(『五島列島』)
 アガ あなた(敬称) 大隅方言(佐多)(「方言」4-5)
 沖縄北部の今帰仁方言や本部町瀬底方言、久米島具志川村鳥島方言、宮古の大神方言、与那国方言等に一人称代名詞に「あ」系の語が観察されるし、『おもろさうし』にも「あ」系がみられる(「琉球方言における人称代名詞」内間直仁、『琉球の方言』1978年所収、等参照)
- アカシ 燈火、アカセともいふらしい「球磨山村語彙」(「方言」5-8)
 アカシ 松の中心を細く割って照明に使った。屋内夜間の仕事はこの火の明りでしたのである 『大隅方』
 ?akasi <松の幹を薄くそいだたきつけ>(『沖辞』)。島袋全発の『沖縄童謡集』に「あかしの薪の一貫んそーらに」とある。喜舎場永珣の『八重山古謡』の「米ノラバヌユングドゥ」にも「アカシタムヌントゥツテキ」とある。
- アカツキ あげがた、暁 宝島(「方言」2-1)
 アカツキ、ヨヒキアケ 暁 種子島(「方言」3-3)
 ?akatʃitʃi <明け方>
 アカリコ 卵黄 『肥後方』
 ?akara: <犬猫豚等親から乳離れした小さいものをいう。動詞は?akari:ŋ>。<卵黄>は?akami:という
- アカマッキア 真紅 『肥後方』
 ?akamakka:ra: <真赤。いかにも赤い>
 アギ 顎、あご 種子島(「方言」3-3)
 アギ 顎 上五島方言考(一)(「方言」7-7)
 アギ 顎 『長崎方』
 アギ 頤 『肥後方』
 あぎ 腮 あご 「はまおぎ」久留米(『九州方言』)
 ?azi <上顎の歯の内側。口蓋>
- アキタロ かじき 『大隅方』
 ?atʃinuʔiju <かじき>。奄美でもアキヌツユというが、アキタローともいう(『奄美方言分類辞典』)
 アケー、アケーズ、又、アケージョーともいう 蜻蛉 種子島(「方言」3-3)
 アーケーショウ、アーケ トンホ 種子島(「方言」3-7)
 アケビ 蜻蛉 屋久島(「方言」4-4)
 アケス 蜻蛉 『大隅方』
 ヤケシ、アケス 『鹿辞』
 アケズという所も 『日向の方言』
 ?a:ke: dʒu: <蜻蛉>
- アコクロ 夕方 『熊南方』
 アコークロ 夕方、日暮れ方 「球磨山村語彙」(「方言」5-8)
 アコクロンモト たそがれ、薄暮 『大隅方』
 ?ako: kuro: <夕方から暗くなるまでの間>
- アサ 黒子、痣 大隅方言概観(「方言」4-5)
 アザ 黒子 『大隅方』

アザ ホクロ、黒子 『鹿辞』
 アザ ほぐろ 『長崎方』
 あざ ほくろ 「はまおぎ」久留米（『九州方言』）
 ?adga <ほくろ>
 アシダ 農具で、牟田に入る時、足が深く入らぬ様両脚にはくもの。形は円く竹で作る『大隅方』
 ?afiga <下駄>
 あじやらツカ 人の心や容態のしまり無くだらしなきを云ふ。〔補〕「あじやら」を「あじやらしい」と形容詞に働かせた語であらう
 上五島方言考（一）（「方言」7-7）
 組踊「女物狂」の「去ちやる三月に、あしゆらしち居らぬ」の「あしゆら」は行方不明の義とされるが、関係あるか。
 あせがる 焦^{アセ}躁るなり 上五島方言集（「方言」7-7）
 あせがる アセル 『佐賀方』
 あせがる 焦燥する 『博多方』
 あせがる 人ノ為ル業ヲ浅ハカニ思ヒ悔リテ
 気悶スルヲ云詞 『菊地俗言考』
 アセイ アセル 『鹿辞』
 ?afigatʃuŋ<焦る、いらだつ>、tʃimʉʃaf
 igatʃisuŋ<前に同じ>
 アセクル 探す 『熊南方』
 アセクル 物を交ぜかえす、鶏が塵塚を交ぜ返す類 『大隅方』
 あせる カキマワス。カキマズル 『佐賀方』
 あせる かき廻はす 『博多方』
 アセイ アサル 『鹿辞』
 ?asaguŋ <ひっかき回す。かき回して捜す>。?asaŋ <前に同意>
 アダ、アダグチ 戸口から入って最初の板の間 『五島方』
 外の事を、西国にてあだと云 『物類称呼』
 アラケ 外 ゴンザ『漂流民』
 アラケ 効外 『鹿辞』
 <外>のことを 国頭村安波で ?ara: 宮古

の大神島で ?a:ra という。
 アタデ にわかに 『日向の方言』
 あたで 急、間に合う、一向に 『都城方』
 アタデ、アタダニ 俄かに、急に、わざわざ『熊南方』
 アタゲ（阿）、アタジャ（菊、玉、飽、市、宇、上、球、天）、アタダ（玉）、アタダニ（河、芦）、アタデー（阿）、アタチャー（全）、アタデー（阿・芦）、以上『熊方資』の<俄（にわか）に>の項より
 アタダ 急、俄 『大分方』
 あただ 物の急なこと、急に 「はまおぎ」久留米、「望春随筆」秋月（『九州方言』）
 あただに 一足飛に、俄に 上五島方言考（一）（『方言』7-7）
 あただに 急に、俄に 「三法論儀集」
 「滑稽 一寸見た夢物語」佐賀（『九州方言』）
 あただい 急に 『博多方』
 ?attani <急に>
 アッパヨ 驚きたる言葉 長崎県南松浦郡五島（「方言」5-12）
 アッパヨ 驚いた時の間投詞 『五島方』
 アッサマナ 意外な 福江（「肥前五島方言集」「方言」1-2）
 ?akisami。?akisamijo:。?ammajo: <感動詞>
 アッタラシ 惜シイ 『鹿辞』
 あつたらし 惜しい、勿体ない 『都城方』
 アッタレー ヲシキ 『大分方』
 アッタラシカ 惜しい 種子島（「方言」3-7）
 アッタラシカ 惜しい 天草牛深（「方言」3-8）
 あつたるか あつたら惜しいの義 上五島方言考（一）（「方言」3-7）
 アッタッカ 勿体ない 『五島方』
 あつたらしい 新トモ 惜トモ 分テモ書ケリ（『菊池俗言考』）

あつたら 勿体なく 『おさらば双紙』
『田舎狂言幕の外外』『古今風俗太平記』以上
佐賀（『九州方言』）

?atarasan<惜しい>。?atarasasan<大切に
にする>

アツェ 大変に、非常に 大隅百引（「
方言」5-4）

?age<感動詞>に似るか。

アトジイ 踵 薩摩方（『鹿辞』）。「かご
しま語あんない」に「あど」という語がでて
いる。

アド 踵 『大分方』

アド 踵 『熊南方』

アド 踵 『肥後方』

跟 きびす くびす 九州にてあど云
『物類称呼』

ado 踵 宝島（『薩南諸島』）

?aru<踵>。首里方言は。?adu。

アトト 仏様。僧 「肥前五島」福江（「
方言」1-2）

アトサマ、アトト 仏様、坊様 『五島
方』

あとと あら尊 「望春随筆」秋月（『九
州方言』）

?a:to:tu <神に祈るときの言葉>

abu 泡 奈留町（『五島列島』）

abu 泡 上五島（『五島列島』）

あぶく 泡 『都城方』

アワブク 泡 ゴンザ『漂流民』

?a:。?a:buku: <泡>（→「ブク」）

アブイコ 焙籠 『鹿辞』

?abuiku: <魚や餅を焼く金網>

あへる あひる（鷺） 上五島方言考（一）
（「方言」7-7）

アフィル あひる ゴンザ『漂流民』

?aφira: <あひる>。今帰仁方言で?app'e:-
ra:という。

アボ 母 枕崎（『鹿児島方言小辞典』）

アボイ 中流以下、母の称 球磨山村語彙
（「方言」5-8）

?amma: <母、お母さん>。波照間島で
は?abwaという。

あまる いちめる、さわぐ、いたずらする『
都城方』

アマル ふざける （玉、宇、上、八、
球、芦、天）（『熊方資』）

あまる サワグ、フザクル 『佐賀方』

アマル 子供が人に対して悪戯をすること『
大隅方』

阿万留 若年ノ者ナトノ元氣溢レテ悪コトナ
トスルヲ阿万留ト云 『菊池俗言考』

アマイ 暴れる 『鹿辞』

?amainj <子供らがふざける、勝手に振舞
う>

アマミ 酔の別名 『大隅方』

アマン（ス） 酔 『鹿辞』

?amadzaki <酔>

アマム やどかり 宝島（「方言」2-1）

?a:manj <やどかり>

アヤ 気力、活力、気根「アヤも気根もね」
（元気の全くない事）『大隅方』

アヤガナカ（ネ） 根気がない 『鹿辞』
『おもろさうし』の「あゆ、ちよく、け
に、あれ」（13-876）、「あよ、ちよく、
げに、あれ」（1-33）の「あゆ」「あよ」
等に関係あるか。

アリムシ、アルムシ 蟻 宮崎県北部、熊
本北東部（『九州方言』）

組踊「執心鐘入」に「蟻虫のたぐひ情ある
浮世、是非も定めらぬ人の怨めしや」とい
う例がある。

アワレ 貧乏心配 『鹿辞』

?awari <難儀、つらいこと>

アンベ アンバー 塩梅、気分 『長崎
方』

アンベ 按排 『鹿辞』

アンベガワリ 病気 『鹿辞』

あんべがわり 塩梅が悪い、都合が悪い、病
気である 『都城方』

あんばいのわるか 病気 『博多方』

?ambe: <あんばい>、?ambe:nu wassa⁰
 <あんばいが 悪い>
 あんまく兒 手にあまる兒、いたずらっ子
 薩摩文学に於ける方言について（「方言
 」5-9）
 ?ammaku <腕白> ?ammaku waraba:
 <いたずらっ子。がき大将>
 いかな いかなる、どんな 「異船早魁神
 評定」佐賀（『九州方言』）
 イカナ 決して 『大分方』
 イカナコツ どんなこと 『肥後方』
 ?ikana <如何な、如何に>
 イギヤ 飯がひ 長崎県南松浦郡五島（「
 方言」5-12）
 ?iizee <しゃもじ>（『沖辞』）
 イゲ 刺 『鹿辞』
 イゲ、ノゲ 刺げ 『五島方』
 イゲ 棘 『肥後方』
 イガ 棘 『肥後方』
 イゲ 刺あるもの、魚の小骨なども 対
 島北（「方言」2-2）
 イゲムシ 毛虫、イゲは刺のこと 種子島
 （「方言」3-3）
 イゲボタン ばら 種子島（「方言」3-
 3）
 いげぼたん 薔薇をいふ。刺ある牡丹の義
 「上五島方言考」（二）（「方言」7-9）
 いげ 刺をいふ。草木等の刺のみならず、魚
 類の骨の小さく尖りたるをもいふ。魚骨の喉
 に刺さりたる時「いげば立てた」などいふ
 「上五島方言考」（二）（「方言」7-
 9）
 イゲボタン ばらの花 『大隅方』
 イゲ 刺、又ソゲ 『大隅方』
 いげ 刺 『佐賀方』
 いげ 刺 『倭訓栞』筑紫（『九州方言』）
 いぎ 井杭いぐい。とげ 『都城方』
 イギ（イゲ） とげ 屋久島方言（「方言
 」4-4）
 n:dzi <とげ。植物、動物、魚骨などのと

げ>
 いごく 動く 『博多方』
 イゴク 動く 『大分方』
 イゴク 動く 『肥後方』
 イゴク 動く 『対馬方』
 イゴク 動く 『鹿辞』
 igoku 動く 中種子（『薩南諸島』）
 inoku 動く 宮之浦（『薩南諸島』）
 innoku 動く 尾之間（『薩南諸島』）
 igoku 動く 黒島（『薩南諸島』）
 igoku 動く 宝島（『薩南諸島』）
 ?ndzutsun <動く>。喜界島志戸桶は?in-
 kjun、名瀬は?igokjunという。
 いしなご おはじきの玉 『都城方』
 いしなご 石投 薩摩にて。石なごという 『物類称
 呼』
 ?ifina:gu:<石なご。小石で競いあう遊び>
 イシビヤ 火砲 ゴンザ『漂流民』
 イヒヤ 石火矢 『五島方』
 ?isibjaa <昔の大砲>（『沖辞』）
 イッスン 聊かも、断じて 『大隅方』
 イッスン ドウシテモ 『鹿辞』
 ?ifjin<少し>?ifjingwa:ru jasami <（距
 離が）すぐそこだ>
 イッセツ 決して 『鹿辞』
 イツヂャイ 決して ゴンザ『漂流民』
 ?ifje: <絶対> 那覇市垣花方言
 イッサンガケ 一生県命走ること、一散駈け
 『五島方』
 ?issan ha:e: <一散走り> ?issanngon
 <一目散>
 いっち 第一 『博多方』
 イッチ イチバン 『大分方』
 いっち 一番、最も 『都城方』
 イツチ 最も 屋久島方言（「方言」4-
 4）
 いっちゃん イチバン 『佐賀方』
 ?ittfin nu:tfin re:dzi jafe: <最も大変な
 ことは>。?iqcin <最も。一番>（『沖
 辞』）

イネブイ 居眠 『鹿辞』
 イネブイゴロ 居眠者 『鹿辞』
 i:ni:bui <居眠り、うつらうつら>
 イヒュー 異風(奇妙) 『大分方』
 イヒュウ 変人 『肥後方』
 いひゅうか フウガハリ(異風) 『佐賀方』
 イップージン 一風人、風変者。変人 『長崎方』
 イヒュー(阿、飽、市、下)、イヒュモン(阿、宇、下)、イヒューモン(阿、菊、鹿、市、宇、八、球、葦)、イフジン(葦)、イフーモン(阿)、以上「熊本県人倫十五方言分布」の変人方言分布の項(「方言」7-3)より
 いへうな人 異兵成人ノ意カ又異変ヲ音便ニ云詞ナラン 『菊地俗言考』
 いひう 世の一般の人に変っている者
 「はまおぎ」(『九州方言』)
 ʔiϕu:na ttʃu <変な人>、ʔiϕu:na muŋ <変なもの>
 いび 指 『博多方』
 いび 指 『佐賀方』
 イビ 指 『大分方』
 イビ 指 『長崎方』
 イビ 指 ゴンザ『漂流民』
 イビガネ 指環 ゴンザ『漂流民』
 いっがね 指輪<今は死語> 『都城方』
 イッガネ 指輪、指金ノ意 『鹿辞』
 いっがね 指金。指輪をいふ 上五島方言考(二)(「方言」7-9)
 ibigane 指輪 黒島(『薩南諸島』)
 ibigane 指輪 宝島(『薩南諸島』)
 えび 指 「大和口上言葉集」薩摩(『九州方言』)
 ʔi:bi <指> ʔi:binagi: <指輪>
 イヘ 位牌 『都城方』
 イヘ 位牌 『鹿辞』
 イヘ 位牌 硫黄島方言集(「方言」4-9)
 ʔi:ϕe: <位牌>

いも 甘藷をいふ。芋にあらず。この地方は甘藷を常食とする故に、いも類の代表的のものとして甘藷のみを呼ぶに至りしならん
 上五島方言考(二)(「方言」7-9)

imo さつま芋 宝島(『薩南諸島』)
 「方言」3-6所収の「長崎県下、西彼・東彼両郡に於ける方言分布の若干に就て」本山桂川によれば調査地19点中11カ所にイモがみられる。

ʔmmu <甘藷>

たういも、りうきういもとも さつまいも
 『筑紫方言』

to:mmu: <甘藷の一種、皮は白く、煮ると中味は黄色>

イヤ 胎盤 長崎版日葡(「方言」2-5)

イヤ 胞衣 対馬民俗語彙稿(「方言」7-7)

イヤ 胞衣 上五島方言考(二)(「方言」7-9)

イヤ 胎盤 『対馬方』

イヤ 胞衣 『肥後方』

いや 産児のえな 『都城方』

イヤ 胞衣 『鹿辞』

イヤ 胞衣 『大隅方』

イヤガワラハス 木阪などで、子が寝ながら笑ふやうになると、是をイヤが笑はすと云ふ
 対馬民俗語彙考(「方言」7-7)

ʔi:ja: <胎盤>、ʔi:ja:warai <乳児が無意識に笑うこと>

イラ くらげの一種 『長崎方』

イラジョ、イラ くらげの棘のあるもの
 『五島方』

イラ 菊草又海月をいふ。共に人を刺す故なり
 上五島方言考(二)(「方言」7-9)

イラ 藪や路傍に叢生する莖に刺のある草
 『対馬方』

イラ いらけむし 『熊南方』

イラ だに(牛蝨)の子か。目に見えぬ位のものであるが体につくと痒くてたまらない。

- 牛をつないだあとなどに多い 『大隅方』
- イラ 水母 『鹿辞』
- ?ira: <夏休みの終る頃から出る小さな人を刺すくらげ>、イラ系の語は全琉に分布している。
- イーコ ふけ 屋久島方言(「方言」4-4)
- いいこ 鱗 『佐賀方』
- iko 鱗 宮之浦(『薩南諸島』)
- iko 鱗 尾之間(『薩南諸島』)
- iriko 鱗 黒島(『薩南諸島』)
- iroko 鱗 宝島(『薩南諸島』)
- イコ 雲脂 『鹿辞』
- イコ、イラコ 鱗 『鹿辞』
- いこ、ふけ 頭垢 『都城方』
- うろこ 頭垢 『都城方』
- イコ ふけ 大隅方言概観(帖佐)(「方言」4-5)
- イラコ 頭のふけ、魚の鱗 『大隅方』
- イリコ 鱗 種子島(「方言」3-3)
- イリコ、ウルコ 雲指 種子島(「方言」3-7)
- イリコ ふけ 屋久島(「方言」4-4)
- イルコ 鱗 ゴンザ『漂流民』
- ?iritfi <ふけ、鱗>
- イリワリ 事の顛末 『対馬方』
- ?iriwai <口論、紛争>
- いろはぬ 西国にてかまはぬ意 『物類称呼』の「物を借る」項に入っている。
- kaiire: <借りいらう、借りる>。首里で
- ?irajuN <借りる>という(『沖辞』)
- イイ 錐 『鹿辞』
- いい、いり 錐 『都城方』
- イリ(イイ) 錐 屋久島方言(「方言」4-4)
- イリ きり、錐 種子島(「方言」3-3)
- イリ 錐 『大隅方』
- イリ 錐 ゴンザ『漂流民』
- ?iri <錐>
- owo 魚 奈良町方言(『五島列島』)
- いお 魚 『博多方』
- イヲ(稀) 魚 『長崎方』
- イヲ 魚 『大分方』
- イヲ 魚 『対馬方』
- イヲ 魚 『鹿辞』
- イヲツリ 魚釣り 『肥後方』
- こいのいお 鯉 『都城方』
- ユヲ 魚 『五島方』
- ヨー 魚 『五島方』
- イヲ 魚 種子島(「方言」3-7)
- イヲ 魚 天草牛深(「方言」3-8)
- イヲ 魚 硫黄島方言(「方言」4-9)
- イヲ 魚 長崎県南松浦五島(「方言」5-12)
- イヲミ 魚群の去来を見張る所 肥前茂木村(「方言」6-10)
- owo, jo:, ijo 魚 福江(『五島列島』)
- io 魚 中種子(『薩南諸島』)
- owo 魚 宮之浦(『薩南諸島』)
- owo 魚 尾之間(『薩南諸島』)
- io 魚 黒島(『薩南諸島』)
- io 魚 宝島(『薩南諸島』)
- いを 魚 『葉隠』佐賀、『はまおぎ』久留米(『九州方言』)
- ?iju <魚>。奄美や沖縄北部では?ju: というところが多い。ku:?iju <鯉> ta:?iju <鮒>
- いん 犬 『博多方』
- イン 犬 『長崎方』
- イン 犬 『五島方』
- イン 犬 『佐賀方』
- イン 犬 『大分方』
- インノコ 犬の子 『肥後方』
- イン 犬 宝島(「方言」2-1)
- イン 犬 種子島(「方言」3-3)
- イン 犬 ゴンザ『漂流民』
- in 犬 宮之浦(『薩南諸島』)
- in 犬 尾之間(『薩南諸島』)
- in 犬 黒島(『薩南諸島』)

in 犬 宝島（『薩南諸島』）
 in 犬 鹿兒島（『薩南諸島』）
 ?in<犬>
 u:su 白 宮之浦（『薩南諸島』）
 ?u:ʃi<白、豆腐等を作る石の白>
 ウカゼ 大風 『鹿辞』
 ウカゼ 台風<大風> 『都城方』
 o:kadze 暴風 中種子（『薩南諸島』）
 o:kadze 暴風 宮之浦（『薩南諸島』）
 o:kare 暴風 尾之間（『薩南諸島』）
 o:kaze 暴風 黒島（『薩南諸島』）
 ウカゼントレタゴツ 子供など大騒ぎをして
 いたのがびったり止んだ、そんな時の静け
 さ、嵐が吹止んだ如く 『大隅方』
 ?u:kazi <大風、暴風>、te:ɸu: <台風>
 ともいう。kazi <風> は普通の風。?u:-
 kazinu jaranne: <大風の止んだように。
 ひどく騒騒しいのが静かになった場合にい
 う>
 ウタテナカ やるせない 『五島方』
 うたてへ 面倒な、汚ない 「望春随筆」
 秋月（『九州方言』）
 ?utta:ti <わざと>
 ウッチ 皮下出血 『大隅方』
 うっち 打身 『都城方』
 ?utʃitʃi <打ち身>
 うったかる 他人の体にふれる。又はもたれ
 る 『都城方』
 ?uttʃakain <もたれる>
 ウッタチ 出発、着手、最初 『大隅方』
 ?uQtaci <出発>（『沖辞』）
 ウッチョク 打捨てて置く 『対馬方』
 「打置けば鳴ゆめ提げとけば鳴ゆめ 里が
 持ちなしど我胴や持ちゆる」（『琉歌全集』）
 という琉歌の「打置けば」は<ほっとけ
 ば、うっちゃっておけば>に近い。
 うっちゃめ 内雨、風のため屋内に降り注ぐ
 雨、横雨 『都城方』
 ウッチャメ 風の為屋内に打ち込む急雨
 『大隅方』

ウッチャメ 横雨、打雨 『鹿辞』
 ?utʃiami<普通の状態では入らない雨が、
 風が強くて入る場合、?utʃiami sugutu
 hafiru ʃitʃa:ʃe:（ウチアメするから戸を
 閉めろ）という。
 トイノウトマエ 夜半一時頃、鶏の歌ふ前
 『鹿辞』
 tuinu ?utain<鶏が鳴く>
 ウベル 湯に水を差す 『対馬方』
 うぶる（又はうむる）（又ウンブルとも云ふ）
 湯の中に水をさす時などに用ひる
 肥後方言集（「方言」4-6）
 ?mbe:in <薄める、埋める>
 ウマ、カカ、ウンマ 母 『五島方』
 ウマ 母、上流家庭で 長崎県南松浦郡五
 島（「方言」5-12）
 うま 母をいふ。旧福江藩に限りて用ひら
 る。乳をうま〜といふ児童語に起りしか
 上五島方言考（二）（「方言」7-9）
 ?amma: <母> →「アホ」「アホイ」
 うむ 果実の熟すること。又化濃すること
 上五島方言考（二）（「方言」7-9）
 ?m:mun <熟す、化膿する>
 うも 芋 「^{豊久}井中水」西国（『九州方
 言』） →「いも」
 ?mmu<甘藷にのみ言う。他は、jama?m-
 mu（山羊）、ta:ʃmmu（田芋）、tʃinnuku
 （やつがしら）等と言う>
 ウラケラシカ 心淋しい 『五島方』
 ウラケラヒカ 旅の夕方など心淋しいのを
 肥前五島（「方言」1-2）
 「見ぼしやうらきらしや誰がしちやること
 が 恨めてもきやしゆが我肝やれば」（『琉
 歌全集』）という琉歌の「うらきらしや」
 は<うら悲しい>意。伊波普猷は「恋人を
 待つ時の又は稚児が母を待つ時のさびし
 さ」がウラチラサの意とする（『南島方言
 史攷』）
 ウレ 雨量。「よかウレでした」 『五島
 方』

エーウリー 好い潤ひ、順調の雨 『肥後方』

ウリ 早天の際の雨。うるいの約ったもの 『大隅方』

ウリ 潤 『鹿辞』

うりい 潤い はまおぎ (『九州方言』)
?uri: <雨が降って土地が十分に水分を含んだ状態を ?uri: so:n̩ (ウリーしている) という>

ウワハ 過剰金 『対馬方』
?wa:ba <よけい>、?wa:bagutu <よけいなこと>、?wa:bamuŋ <よけいな物>

エツ 灸 『大分方』

えっ 灸、やいと 『都城方』

エツ やいと 大隅方言 (帖佐) (『方言』4-5)

エツ やいとの訛、お灸 『大隅方』

えっ 灸、やいと 『鹿辞』

ヤツ 灸 『五島方』

ヤト 灸 『肥後方』

ja:tʃu: <やいと>

ヲ アラソに灰をいれてたいて外皮をとりかけたもの 熊本県山村語彙 (『方言』6-12)

ヲム ヲを細くさいてつなぐこと 熊本県山村語彙 (『方言』6-12)

お 麻 『都城方』

オ 麻 苧 『鹿辞』

オ 麻 ゴンザ『漂流民』

u:be: <苧麻>、喜界島の志戸桶は wu:, 先島は bu: である。

オヨビ 帯 屋久島方言 (『方言』4-4)
?u:bi <帯>

オギ 甘蔗 硫黄島方言 (『方言』4-9)

オーギ 甘蔗 種子島 (『方言』3-7)

オーギ 甘蔗 屋久島 (『方言』4-4)

o:gi 砂糖きび 中種子 (『薩南諸島』)

o:n̩i 砂糖きび 宮之浦 (『薩南諸島』)

o:n̩i 砂糖きび 尾之間 (『薩南諸島』)

u:zi <砂糖きび>

o:ke 桶 宮之浦 (『薩南諸島』)

u:ki <桶>

オキイ 燠 (起火) 『鹿辞』

オキイ 田畑裏の置き火、点火炭 『都城方』

オキリ 火 『大分方』

オキ 炭火ノ雅言ナリ 『大分方』

オキ 火のついた炭 『肥後方』

オキ 火種 『博多方』

?utʃiri <薪が燃えて炭火のようになった部分。?utʃiribi: ともいう。bi:はçi: <火>の連濁

オキナコボシ 不倒翁、起上り小法師 『大隅方』

オキノコボシ 起上り小法主 『肥後方』

おきらこぶし ダルマ 『都城方』

?uttʃirikubusa: <起上り小法師>

オキバイ、オツバエ 南西風の南よりの風 『五島方』

オキバイ 沖南風、南の沖より吹き来る風の意 『長崎方』

オキバエ 西南風 種子島 (『方言』3-3)

『おもろさうし』の「にしこわば、にしなれ はゑこわば、はゑなれ」(13-928)の「はゑ」は<南風>の意

オクリ 壱岐の八幡で葬式をいふ 対馬民俗語彙考 (『方言』7-7)

オクイ 葬送 大隅方言概説 (『方言』4-5)

オクイ 葬式 『鹿辞』

オクイ 葬送 『都城方』

オクイ 葬送 『大隅方』

okui 葬式 尾之間 (『薩南諸島』)

?ukuin̩ <葬送する>

オコモリ 曖、おくび 『肥後方』

オコブリ 胃に満ちた空気の上り出るもの。

おくび 『対馬方』

オコブリ おくび 『長崎方』

おこぼり 物を食ひのみたる後に吐気の付き
て出づる息 『佐賀方』
おこぼり おくび 『博多方』
?ikibui <おくび、げっふ>
お坐^サ 座敷ヲ云客ナトヲ招待スル坐故ニ尊テ
御坐ト云 『菊池俗言考』
「蘭の匂立ててお座に伽羅たけば ほこて
清ら瘡の神やいまるら」（『琉歌全集』）
という琉歌の「お座」は<お座敷>の意。
オサイ 副食物 熊本阿蘇、大分（「方言」
6-10）
オセエ 副食物 対島比（「方言」2-2）
サイ 副食物 熊本市、大分西国東郡、大
分宇佐郡（「方言」6-10）
sakinu ?ufe: <酒の肴> というふうによ
うに用いられる。?ufe: 単独では使われない。
おじ 恐しい 『都城方』
オジ 恐ロシイ 『鹿辞』
オズィ おそろしい。オトロシに同じ
『大隅方』
オゼ こわい、恐ろしい 『肥後方』
オゼモン こわいもの 『肥後方』
オジー人 怖シイ人 『大分方』
?uzi:ŋ <恐れる、おじる>
おぞむ 目さます 『博多方』
おずむ メサムル 『佐賀方』
オズム、オゾム 目覚める 『五島方』
オゾム 目サメ 『大分方』
オズム 目覚める 『肥後方』
オゾム 眼をさます 『熊南方』
オズム（全<熊本県全部、筆者注>）、オゾム
（阿、菊、鹿、玉、飽、市、上、下、八、
球）以上『熊方資』の<目を覚（さま）
す>の項より
おずむ 目が覚める 『都城方』
ねおずん 目覚め 『都城方』
オズン 覚メル 『鹿辞』
オズム 目が覚める。殊に小児について用い
ている 『大隅方』
ネオズン 夜間子供が目を覚す 『大隅

方』
オゾムル 目が覚める 種子島（「方言」
3-11）
オゾム 目が覚める 屋久島（「方言」4
-4）
おぞんだ 目のさめた 筑紫方言（「方言」
1-3）
目さむるといふ事を、薩摩及肥前にて。をぞむ
と云 『物類称呼』
odzomu 覚める 中種子（『薩南諸島』）
oromu 覚める 尾之間（『薩南諸島』）
ozomu 覚める 黒島（『薩南諸島』）
odzomu 覚める 宝島（『薩南諸島』）
?uzumuŋ <目覚める>
おちゃうけ 茶菓子 『博多方』
オチャウケ お茶菓子 『五島方』
tʃawaki <茶請け>
おちゃとう 仏前に茶を供へる 『博多
方』
チャトー 茶托。仏前に供する茶 『長崎
方』
?utʃato: <仏壇に供える茶。茶湯> tʃato:-
minto: ともいう。
おちる ウツス。釜の飯を飯櫃に移すこと
『佐賀方』
?uti:ŋ <鍋釜等の食物を他の容器に移すこ
と>
オッカ 借金 『鹿辞』
オッカ 負債、借金 『大隅方』
?ukka <負債、借金>、?ukka kandʒuŋ
<負債をかかえこむ>
おとてえ 一昨日 『佐賀方』
オトテ 一昨日 『鹿辞』
オトテ 一昨日 種子島（「方言」3-
3）
オトテ 一昨日 硫黄島（「方言」4-9）
utti: <一昨日>
オトロシカ こわい 『五島方』
オトロシイ おそろし、おどろに同じ
『対馬方』

おっとりしか オソロシ 『佐賀方』
オトロシカ 恐ろしい 『肥後方』
オトロシ 恐ロシ 『大分方』
おとろし 恐ろしい 『都城方』
オトロシ 恐シイ 『鹿辞』
おとろし 荊オトロ〜シキノ略カ 『菊池俗言考』

おとろし(を一) 恐ろしい、こわい
「倭訓栞」西国、「東海道中膝栗毛」西国、
「はまおぎ」久留米、「大和口上言葉集」薩摩(『九州方言』)

?uturusuŋ <恐ろしい>

オナゴ 女、下女にもいう 『長崎方』
オナゴ 女、女の子 『肥後方』
ヲナゴ 下女 『大分方』
おなごし 女中 『博多方』
おなごめら おんな女郎<女の卑称>
『都城方』
オナゴキレ 女嫌 『鹿辞』
オナゴ 女 ゴンザ『漂流民』
onago 女 奈留町方言(『五島列島』)
onago 女 福江(『五島列島』)
onago 女 上五島(『五島列島』)
onago 女 中種子(『薩南諸島』)
onajo 女 宮之浦(『薩南諸島』)
onajo 女 尾之間(『薩南諸島』)
onago 女 黒島(『薩南諸島』)
onago 女 宝島(『薩南諸島』)

inagu <女>。『琉球方言の総合的研究』
によれば、奄美は wunagu 系が多い。

おばいけ 鯨の白味 「筑紫方言」長崎(『九州方言』)

おばけ 鯨の白味 「筑紫方言」長崎(『九州方言』)

オバヤキ 尾羽焼、鯨の尾羽を製したもの
『長崎方』

?uba <鯨の加工された白い肉。酢味噌をつけて食べる。祝用の食べ物である>

オビ 桶のたが 『都城方』

オビ 桶、樽のたが 『大隅方』

オビ 桶のたが 種子島(「方言」3-3)

?u:bi <帯>。?ubi <桶や樽のたが>

オッカ(オブカ)(薩) 重イ 『鹿辞』

オビ 重タイ 『鹿辞』

obuka 重い 中種子(『薩南諸島』)

obuka 重い 黒島(『薩南諸島』)

obë: 重い 宝島(『薩南諸島』)

オブイ 重い 宝島(「方言」2-1)

?mbusanj <重い>

おぶく 仏前に供ふる飯 『佐賀方』

?ubuku <仏壇等に供える飯。湯飲み茶碗などに円錐形に盛りあげる>

オフレメエ お振舞い、饗応 『対馬方』

?uφurume: <祝いのお振舞い>

おもす 蒸す 『博多方』

おもす 蒸す 『都城方』

おむれる、おもれる 飯などがよくむされる
『都城方』

オモス 蒸す、蒸暑い 『大隅方』

オモス 蒸す 『鹿辞』

?mbusanj<蒸す>、?mburi:ŋ<蒸れる>、

?atjisanu ?mburi:ruguto:sa <暑くて蒸れるようだよ>

おらぶ 古語「おらぶ」怒鳴る 『博多方』

オラブ 呼ぶ 『対馬方』

オラブ(阿、菊、玉、市、宇、上、八)

以上『熊方資』の<叫ぶ>項より

オラブ 高声ニテ呼ブ 号ブ (東)(分)
(速)上中等(北)上浦(日)(『大分方』)

おらぶ <叫ぶの古語>、大声で呼ぶ
『都城方』

オラッ 叫ブ 『鹿辞』

オラブ 叫ぶ、鳴く。泣く意味はない 『大隅方』

ヲラブ、ヲロブ 叫ぶ 種子島(「方言」3-7)

おらぶ 人を呼ぶ 『筑紫方言』

おめきさけぶと云詞のかはりに、九州及四国にて。おらぶと云 『物類称呼』

「いや、許^{ゆる}すことならぬ放^{ほな}すことならぬ。
あびゆらばあびれ、おらびゆらばおらべ」
(組踊「女物狂」)の「おらびゆらばおらべ」は<叫ぶなら叫べ>の意である。今帰
仁村方言の ?urabuŋ は<はかなむ、ぐち
をこぼす>ほどの意のようである。

オリメキリメ 節日 佐須村 (対馬民俗語
彙稿「方言」7-7)

ujumi <村落共同体に係わる祭り>

おろい もろい、粗末な、こわれやすい
『都城方』

オロイ、オロエ 粗末 『鹿辞』

オロイ 悪い、よくない、衣類などに関して
言う 『大隅方』

オロイー ワロシ、粗末ナ (北) 佐賀関
(速) (西) 中以下 (宇) (東) 『大分
方』

おろい 悪い、粗末な 「筑紫方言」九州
(『九州方言』)

おろ (接頭) 程度の卑きを現はす語。「お
ろ覚ユル」はさほど覚えぬこと 『佐賀
方』

おろよか (悪い)、おろええ (良くない)
『博多方』

オロヨカ 粗末な 『五島方』

オロミミ 耳の聞えの悪いこと 『大隅
方』

オロオホエ 覚えの悪いこと 『大隅方』

オロミエ ぼんやり見えること 『大隅
方』

?urusəŋ <にぶい、足りない>、ni:?uru-
saŋ <煮たりない>、?uruni:to:ŋ <物
がよく煮えてないときに言う> ?uruni:
namani: <生煮え>

が (格助詞)

オガエ 私の家 屋久島方言 (「方言」
4-4)

ンノガイエ 私の家 屋久島方言 (「方
言」4-4)

オイガエ 私の家 大隅方言概観 (「方

言」4-5)

所有・所属のgaは?ariga muŋ <彼の物>、
?ariga ruŋi <彼の友> のように三人称の
代名詞につくが、wa: (wan) <私>、
?ja: <君> の場合は、助詞を必要としな
い。

カワ 井戸 天草牛深 (「方言」3-8)

カハ 井ノコト 『大分方』

kawa 井戸 黒島 (『薩南諸島』)

kawa 井戸 宝島 (『薩南諸島』)

カー、ツボカー、イトカワ 井戸 『五島
方』

カー、ツボカー 井戸 肥前五島 (「方言」
1-2)

カワ、クミコー 井戸 種子島 (「方言」
3-3)

イガワ 井戸 『長崎方』

イガワ 井戸 『熊南方』

イガワ 井戸 『肥後方』

イガア 井戸 『鹿辞』

キガワ 井戸 種子島 (「方言」3-7)

キガワ 井戸 屋久島 (「方言」4-4)

キガワ 井 大隅方言概観 (「方言」4-
5)

イガワ 井戸 ゴンザ『漂流民』

いがわ 井戸 「はまおぎ」久留米 (『九
州方言』)

tsuboka: 井戸 稲江 (『五島列島』)

tsuboka: 井戸 上五島 (『五島列島』)

tsuboka: 井戸 奈留町 (『五島列島』)

「方言」3-6 所収の「長崎県下・西彼・東彼
両郡に於ける方言分布の若干に就て」本山桂川
によれば調査地19点中3地点がカワ、2地点が
キガワ、10地点がツリカワ、他は複数語併用で
ある。

ka: <井戸>。名瀬はjigawaである (『琉
球方言の総合的研究』)

kwa:ŋi 菓子 宮之浦 (『薩南諸島』)

kwa:ŋi 菓子 尾之間 (『薩南諸島』)

kwa:ŋi <菓子>

がい 目的、のために、に「踊見^{をどりみ}ガイ^ゆ行く」
 「博多小女郎浪枕」長崎（『九州方言』）
 あんげへいく あちらへ行 『筑紫方言』
 こんげへいく こちらへ行 『筑紫方言』
 あんぐひ あすこへ 「はまおぎ」久留米
 （『九州方言』）
 あんなげ あそこ 「物類称呼」西国（『九州方言』）
 あんなげこんなげ あそこここ 「倭訓栞」西国（『九州方言』）
 こんがへ こちらへ 「望春随筆」秋月
 （『九州方言』）
 こんぐい ここへ 「はまおぎ」久留米
 （『九州方言』）
 け 目的、のために・に「つんなふて見ケいかふけひ」
 「柳川方言涸河一撮」（『九州方言』）
 ミケイッ 見ニ行ク 『鹿辞』
 シケ行く 仕に行く 『鹿辞』
 カタイケ 語りニ 『鹿辞』
 け（動詞の接尾語で目的を現わす 書店に本買け行く） 『都城方』
 ケ にに相当する助詞。「水浴びケ行こ」「書物よんケ来た」（本を読みに来た） 『大隅方』
 『九州方言の基礎的研究』 p170 によれば、薩隅方言と豊日方言の南部辺にはケー・ケ、肥筑方言辺はゲー・ゲとギャー・ギャイ・ギャ、豊日方言の北部もギャー・ギャイ・ギャの地域である。豊日方言の中部、即ち、大分南部と宮崎北部を除いて「行為の目標」を表す上記の形式群が九州方言に分布している。
 n:dʒiga ʔitʃuŋ <見に行く>、ʔaʃibi:ga ʔndʒaŋ <遊びに行った> のように接尾辞として存在する。琉球方言には広く分布する接尾辞である。
 ガート 非常ニ多シトイフ場合ニ用フ（速）
 非常ニ、大変ニ 『大分方』
 ガイト 非常ニ（速） 非常ニ、大変ニ
 『大分方』

那覇市垣花方言で <非常に、とても> を gatta とか gattika という。
 カイゴ カイコ（日）中以下 蠶 『大分方』
 かひご 蚕 「日暮芥草」対馬（『九州方言』）
 カーゴ 蠶様 種子島（「方言」3-3）
 ケゴ、ケゴジョ 蠶 『鹿辞』
 けご、けごじょ 蚕、毛子 『都城方』
 ケゴジョ 蚕、おこさま 『大隅方』
 ケゴ 蠶 大隅方言概観（「方言」4-5）
 キャーゴサー 蠶様 佐賀馬渡島（「方言」2-10）
 「方言」3-6 所収の本山桂川論文に長崎県西彼・東彼両郡の19地点の調査があり、それによるとカイゴ・ケーゴ・キャーゴなどという形がみられる。
 kaigu <蚕>（『沖辞』）
 カイヤ 仮屋。昔の村の役所の名 『大隅方』
 kaija <薩摩の在番奉行のいる所>。 mitʃinu tʃurasaja kaijanu me: <道の美しさは仮屋の前（の道だ）>などと歌われる。
 カカジル 搔ク（日）下等、カク 『大分方』
 かかじる 抓把する、搔き散らす 『肥後方』
 カカジル 爪でひっかくこと 『日向の方言』
 かかじる 痒いところを搔く 『都城方』
 カカジル 爪なり尖ったもので皮膚や地面などを搔く 『大隅方』
 カカジイ 搔く 『鹿辞』
 kakaʒi:ŋ <引っ搔く。畑を耕すことを卑めても言う>
 カキオ 間に合う、遅刻せぬ。「漕車にカキアワン」（間に合わぬ） 『大隅方』
 カキオハン 駈ケニアハヌ 『鹿辞』
 かきおた 間に合った 『都城方』

- kakio:iŋ** <間に合う>、**kakio:raŋ** <間に合わない>
- ホンゾンカケタカ 時鳥の声 『大隅方』
 沖縄本島国頭村の方言で**kundzaŋkakitaka**
 と鳴く鳥がいる。
- かけよた 交渉した 『都城方』
kakie: sari:iŋ <談判・交渉をもちかけられる。文句をいわれる>
- ガゴ 自我強き人 『肥後方』
ga:dzu: <我が強い人>、**ga:dzu:san** <我が強い>
- カズン、カズム 嗅ぐ 『五島方』
 かざむ、かずむ カグ (嗅) 『佐賀方』
 カザム 嗅ぐ 『肥後方』
 カザム 香ヲカザム 『大分方』
 カザイ 匂フ 『鹿辞』
 カズン 嗅グ 『鹿辞』
 かざ におい、臭気、香り 『都城方』
 かずむ 匂いをかぐ 『都城方』
 かざむ 嗅ぐ 「はまおぎ」久留米 (『九州方言』)
- kaza** <におい。臭気の場合にも使われる。かおりは **kaba** という>
- カシ 加勢の訛。手伝い 『大隅方』
ka:ji: <加勢、手伝い>、**ka:ji:sun** <加勢する、手伝う>
- カジムル 納ひ込む 『肥後方』
ka:zimi:iŋ <仕舞う>
- カスル すする、啜る 『対馬方』
go:nga:ji: <ぐいぐい飲むこと>
 首里で **ka:si:ju:n** <痛飲する。大酒を飲む> (『沖辞』)
 具志川市の方言で **ka:fi:re:** とは <飲め> ということ
- ガタ 川岸の水にひたり易い水附きの辺
 球磨山村語彙 (「方言」5-8)
- ガタ 海底の泥地 肥前茂木漁村語彙 (「方言」6-10)
- ガタ 小石の海底 豊後網代 (「方言」6-10)
- ガタ 海が遠浅で潮干た時は地面の現れる処、又はその泥土をいう 『対馬方』
 ガタ 溝 『長崎方』
gata <海岸の埋立地>、**katabaru**、<干潮に海底が出現する所>
- かたいどし トモダチ 『佐賀方』
 カタル 加わる 『五島方』
 カタル 共ニスル 『大分方』
 カタス 仲間に入れる、参加させる 『都城方』
 カタイ 仲間ニ入ル 『鹿辞』
ka:ta: <仲間>、**ka:ta:sun** <仲間になる>
- かたがし らくがん 『かごしま語案内』
ko:gwa:ji <らくがん>に關係あるか
- かたげる かつぐ 『博多方』
 カタゲル 擔ぐ 『博多方』
 カタゲル かつぐ 『肥後方』
 カタメチ かついで 『肥後方』
 カタゲル 擔フ 『大分方』
 かたげる 担グ 『都城方』
 カタゲッ 擔グ 『鹿辞』
katami:iŋ <担ぐ>
- ふいのかつ 古い方<にのかつの反対> 『都城方』
 沖縄北部方言や奄美の諸方言に方向を表す **kat:ji** 系の助詞があるが、それに関係あるか。
- ガツチエン ガテン (日) 申以下 合点 『大分方』
 がってん 合点 『菊地俗言考』
gatt:iŋ <合点>、**gatt:iŋ jasa** <合点だ>、**gatt:iŋ naraŋ** <合点ならぬ>
- かて 乏しい。少ない 『かごしま語案内』
 カテ 乏しい。少い 『大隅方』
kate:muŋ <むつかしい。困難だ>、**tʃ'u nai:fe: kate:muŋ** <一人前になるのは困難だ>
- カテモン 副食物 『熊南方』

カテモン おかず 『肥後方』
 カテモン 副食物 「大隅方言概観」(「方言」4-5)
 カテムン 副食物、漬物。ソエムンともいう。飯汁以外のつきものをいう 『大隅方』
 カテムン 副食物 『都城方』
 カテムン 副食物 『鹿辞』
 katimunj <おかず>
 カテル 加へる、つけ加へる 『肥後方』
 カテル 自動詞ノ加ハルコトニ用フ (宇)
 (西) クハフル、クハハル 『大分方』
 kati:nj <おかずにする>、?ufiru katiti
 kame: <お汁をかてて食べよ>
 カナ カンナ 『佐賀方』
 カナ カンナ 『大分方』
 カナ かな、匏 宝島(「方言」2-1)
 カナ 匏 『鹿辞』
 カナクッ 匏屑 『鹿辞』
 kana <かな>、kanakuri: <かななくず>
 かな 糸の束 『都城方』
 kana <膝。かせにかける 前の一束にした糸>(『沖辞』)
 ガナ 古書に散見するガナである。「何ガナ差上げて」(何をなり差上げない) 『大隅方』
 nu:gana ne:ni <何かないか>、nu:gana kwi:sa <何かやるよ>
 がね 蟹 『博多方』
 がね カニ 『佐賀方』
 ガネ 蟹 『鹿辞』
 がね 蟹 『都城方』
 ガネ かに 天草牛深(「方言」3-8)
 ガネ 蟹 硫黄島方言(「方言」4-9)
 ガニ 蟹 『肥後方』
 ガニ 蟹 『大分方』
 ガニ 蟹。田舎の語である 『対馬方』
 ガン 蟹 対馬北(「方言」2-2)
 ガン、ガニ 蟹 種子島(「方言」3-3)

(ガン) ガニ 蟹 屋久島方言(「方言」4-4)
 ga:n 蟹 上五島(『五島列島』)
 gani, gen 蟹 上五島(『五島列島』)
 ga:n 蟹 福江(『五島列島』)
 gani<蟹>。『八重山語彙』によれば、石垣、白保、竹富は kanj である。
 ガネラン カニサボテン 『鹿辞』
 ganiranj <カニサボテン。新しく入った言葉か>
 カノー 負けヌ 『大分方』
 kanainj <勝つ。まかす>
 カノク 砂地、すなち 宝島(「方言」2-1)
 kaniku <砂地。沖縄には兼久のつく地名がいくつも見られる>
 カノシシ 鹿 『長崎方』
 カシシ 鹿 肥前五島(「方言」1-2)
 カノシシ 鹿、鹿の猪 『肥後方』
 カノシシ 鹿 球磨山村語彙(「方言」5-8)
 カノシシ 鹿 『鹿辞』
 カノシシ 鹿 種子島(「方言」3-3)
 かのしし 鹿 「年中行事」佐賀(『九州方言』)
 koonusisi <⊖鹿。⊖鹿の内>(『沖辞』)
 座間味村慶留間で ko:nafiji という。
 かばしか カウバシイ 『佐賀方』
 カバシカ 焼けて香のよいこと、カバシ 『熊南方』
 カバシー(阿、菊、鹿)、カバシカ(全)、カンバシー(天) 以上『熊方資』の<香ばしい>の項より。
 かばし 香しい 『都城方』
 カバシ 香バシイ 『鹿辞』
 kabasanj <香ばしい>、i: kaba <良い香>、kaba ?uko: <匂のよい線香>
 カバシ 魚を釣る時、先ず魚を誘い寄せる為、糖の炒ったのを泥に混じり団子を作って水中に投込む、その名 『大隅方』

kabu <まき餌>、kabu matfuj <まき餌
をまく>等関係あるか。

カバチ 顔面 対島北(「方言」2-2)
シチカバチトラカス 頬を撲す、シチホウゲ
タクラハスとも 『対馬方』

kamatfi warari:mi <頭割られるか>のよ
うに用いられ、単独には用いられない。こ
の場合の kamatfi は tʃiburu <頭> の卑
語である。奄美大島本島の名瀬、大和浜、
古仁屋などではカマチは普通の<頭>のこ
と、宮古では、この系統の語は<ほほ>を
意味する。

かぶ かび 『博多方』
かぶ カビ 『佐賀方』
カブ かび 『肥後方』
カブ カビ 『大分方』

ka:bui <醤油の上に浮いている白いかび>
がへけ 痰気 「はまおぎ」久留米(『九
州方言』)

geeci <風邪。風邪きみ。咳の有無にかか
わらずいう>(『沖辞』)

がま 洞穴、ほらあな 『都城方』
ガマ 洞穴 『鹿辞』
ガナ 穴、鰻でも入っていそうな水中の小穴
を特に言っている 『大隅方』
スナトイガマ 一帯の岩壁下に恰かも穴居時
代を偲ばせる様な洞穴に至る所にある、その
名。これは白砂を採取する所である。『大
隅方』

ガマ 洞 大隅方言概説(「方言」4-5)
ガマ 洞穴 大隅百引(「方言」5-4)
ガマ 川の淵の洞穴(水中にかくれた所)
球磨山村語彙(「方言」5-8)

gama <洞穴、鐘乳洞>

かまぎ 吠 『博多方』
カマギ 吠 『長崎方』
カマギ 吠 (宇) (速) (玖) 『大
分方』
カマゲ かます 吠 『肥後方』
かまげ かます 『都城方』

カマゲ カマス 『鹿辞』
カマゲ 籠を二つ折りにして綴合わせ、米を
入れるもの 『大隅方』
カマゲ かます 宝島(「方言」2-1)
カマゲ 吠 大隅百引(「方言」5-4)
カマゲ 穀物をいるる一種の吠 壹岐島(「
方言」6-11)
カマゲ 吠 熊本県山村語彙(「方言」6
-12)
かまげ 吠 『菊池俗言考』
かまき 褰、かます、かまけ 『物類称呼
』西国・唐津

kamazi: <かます>

がまだす ハゲム 『佐賀方』
ガマダス ハタラク (南) 『大分方』
ガマダス 勤勞する 『肥後方』
ガマダス 精出す 熊本県山村語彙(「方
言」6-12)
がまたす 精出す 「はまおぎ」久留米、
「柳川方言涸河一撮」柳川、「望春隨筆」
(『九州方言』)

がまだしもの 家業ニ慢ル意ナルヘシ 『
菊池俗言考』
『九州方言の基礎的研究』p122 のガマダスの
一覧表によれば、熊本県を中心として、それに
隣接する大分西部・福岡南部・佐賀東部、それ
に宮崎の北西辺にも分布している。

gaama <無茶。無茶な行為>(『沖辞』)
今帰仁方言の gama は<うそ、からかい、
いたずら>である(『今帰仁村史』)

かむ 食べる 『都城方』

kamuŋ <食べる>

かやす 返却する 『博多方』
カヤス 返す 『肥後方』
かやす ぬかす、ひっくりかえす、返へす
『都城方』
カヤス カエス 『鹿辞』
カヤス 倒ス、倒ル (宇) 『大分方』
ke:suŋ <返す>、ke:rasuŋ <倒す>、
ke:ri:ŋ <倒れる>